KSKQ　第三種郵便物認可ＫＳＫＱ（サロン・あべの）通刊２７４号１９９２年１０月１８日

サロンあべの

出合い　ふれあい　助け合い

NO76

地域福祉を創る

毎月十二回（二・四・六・八の日）発行　一九九一年九月三日第三種郵便物認可

＜九月の出会い＞

サロンあべの九月の出会いは、平成四年九月十九日（土）桃山学院大学社会学部の教授でいらっしゃる上野谷加代子先生をお迎えして、「地域福祉を創る」というテーマでお話しをしていただいた。今回は、あべのボランティア・ビューローで活動している「ボランティアのつどい」のメンバーの方々も参加され、いつもの研修室は超満員のにぎやかな出会いとなった。

「地域福祉の重視」ということが盛んにいわれているが、いざ地域福祉とは何かといわれると意外に難しい。しかし、先生は私たちの暮らしと結びつけながらわかりやすくお話しくださり、これからの活動のヒントをいただいた。大学の講義では何回分にもなるような盛りだくさんの内容であったが、その一部を不十分ながらまとめてみた。

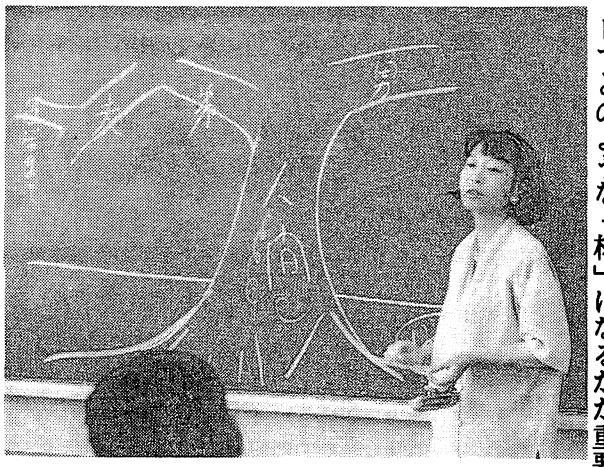
□　□

地域福祉は、生活と結び付けて考えなければ意味がない。

地域社会はわれわれの生活の場であり、そこには生活を阻害するものがある一方、問題を解決するための宝がかくれている。地域で何ができるか、逃げずに取り組んでいかなければならない。

都市生活は、合理的、機能的な上に成り立っており、多くのことはどこかで共同しているが、その仕組みが見えにくい。私たちの暮らしは誰かに助けてもらわないと成り立たないということを知らせていくことが必要である。

暮らしは「役割の木」を伸ばすことである。豊かな生活は自分の思う役割の木が伸びていくことであり、それは地域という土や雰囲気によっても左右される。都市では他人の「木」の枝振りを見る余裕がないが、ひとりひとりの「木」が集まって、地域としてどのような「林」になるかが重要であ

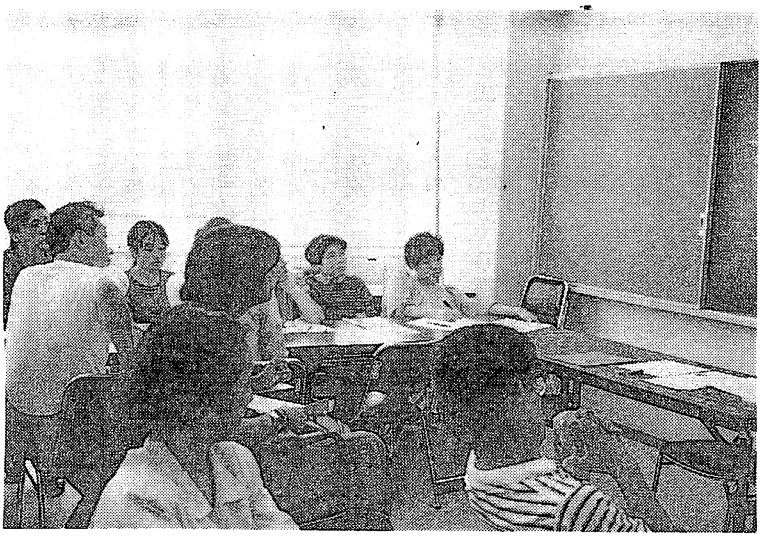


ナンペイさんの「役割の木」

個人の生活は私的なものであるが、すべてのことを私的に解決することはできない。「ケア」の問題でも、私的扶養の限界を認めあうことにより社会的な保障が必要になる。しかし社会的な保障とは国家による保障ということだけではない。ケアの社会化では「パブリックなもの（公共）」「コマーシャルなもの（市場）」「コミューナルなもの（協働）」の3つをミックスさせることが必要であり、そのための新しい方法がネットワークやケースマネージメントである。フォーマルなサービスとインフォーマルな援助が統合されて地域で実現するのが地域福祉である。地域の問題は生活に密着したものとして地域で解決するように、独自の方法を認めることが大切だ。

社会的にケアを行うシステムを考えていくには、「ケア」ということばを広い概念で考えたい。ケアには相手を良く知るための「知識」、お互いの波長を合わせる「リズム」、相手に内省し、エネルギーを出させる余裕を与える「忍耐」、あるがままの相手を見つめる「正直」、お互いの「信頼」学びの気持ちとなる「謙遜」、「希望」や「勇気」などの要素が必要である。地域福祉は、ケアを専門職にゆだねきるのではなく、市民の手に取り戻す戦いといえる。

時間が短く、まだまだお聞きしたいこともたくさんあったが、またの機会をお待ちすることにした。また、サロンの活動についても、違う分野の人を巻き込んで、知ってもらうきっかけにしていくことが重要なので、サロンと区のネットワーク委員会の交流なども必要とのご意見もいただいた。今回の参加者は四十七名、司会とまとめは原田仁。



私たちの〝地域福祉を創る〟

自らが創る福祉

丸　山　寿美子

残暑の続く九月の例会に久しぶりに参加し、上野谷先生の「地域福祉を創る」の講演を聞かせていただきました。

私自身、仕事柄色々と勉強させていただきました。又、大いに反省もしています。

公的援助にも色々ありますが、自ら関係機関に申請する事によって活用できるものが多く、実際には充分に利用されていない様です。

情報提供や手続きの代行等、ボランティアで十分できる部分も多くあり、在宅の方とのパイプ役になったりして、地域で実績を作りながら、行政へ問題提起をしていくのも必要かと思います。

行政担当者には、事ある毎に顔を見せて自分達の存在を知ってもらう事で、計画を策定する迄の資料作りに参加出来る様、当事者、ボランティアの方からも再々要望していきたいものです。

最後に、地域住民が行政を動かすことを目指していかなければ、待っていてはダメだと思います。各々の要望が、大か小かによって動く部分も多くあります。この事は私が直接仕事に関わって感じた事です。

多くの人達と出会って、良いお話を聞かせていただき、ありがとうございました。

運営委員の皆様に感謝致します。

初めてサロンの出会いに参加して

長　島　伊津子

「サロン・あべの」紙を毎回冨田さんより送っていただいき、愛読はしておりましたが、会員的立場でなかったので、「なかなかやるな！」と言う気持ちで拝見させてもらっていました。

過日、冨田さんが新聞に紹介されたりした事で、取材に行かない？と今西さんに誘われて九月の出会いに京都から三人今西さんの運転で、育徳コミュニティーセンターに出かけました。小じんまりしたこの建物には、二階まで登れるスロープがついていて、健常者も身障者も使える様になっていました。

この日は「地域福祉を創る」と言うお話を上野谷加代子先生より伺いました。

若々しくすてきな先生で、ユーモアも交えてのお話に何だか大学の聴講生になった気分でお聴きしました。

先生の講義はなかなか的を得ていて、なるほどとうなずけました。人間を木にたとえて、地域の土に根をはった人間の木。その枝を伸ばすことが必要だけど、土が悪いと根が腐って木が育たない。自分の木を育てる根元を見つめて行くことが必要だということや、共同、協働（違いを認めつゝ協調していく）についての話。人間はどんな立場の人でもケアなしでは生きて行けない。お互いの助け合いを通じて生きて行く事がケアである。お互いの波長を合わせ、リズムがとれるかどうかが問題とか。

参考になるお話ではあったが、ケアと言うことになると個々によってその幅が広いと思う。一、二時間の介護から、二四時間の介護を必要とする人もいる。社会もたんにボランティアの行為に甘えるのではなく、

障害者であっても自分の求めたい事を当然の権利として社会参加できるシステムを作る様努力しなければ、人としての尊厳を保って生きて行けないのじゃないかと思いました。色々と考えさせられた一日でした。

九月のサロンに参加して

森　芳江

サロン・あべの紙を初めて見せてもらったとき、出会い・ふれあい・助け合い、このなんとも優しい言葉のひびきにひかれました。

いつも素敵な企画でいいし、以前から一度寄せてもらいたいと言っていましたら、九月のサロンに参加させてもらうことができました。

上野谷先生のお話「地域福祉を創る」は、とてもわかりやすくて、楽しく聴かせていただきました。地域福祉を考えるとか、地域福祉の充実をといったことは、最近よく聞くのですが、「ほな、それは、どうしたらいいの？」という疑問と、ちょっぴり不安もありました。

先生のお話は、そのことをずばり教えて下さいました。

自分がその地域の中で、いかに生きやすくするか想像して、イメージをどんどん膨らませていく。そして、それはケアを受ける側も、またする側もとても大切なこと。とのお話に勇気が出る思いがしました。

生活すること、生きるそのことが福祉なのですね。

コミュニティーセンターは、その名のとおり作業所や児童館、福祉ショップや素敵なギャラリーもあって、誰もが自由に出入りできる建物で羨ましいなと思いました。

八幡市は、児童館は児童館だけ、公民館はどこも土足厳禁です。スロープは付いていても、車イスは・・・やっぱりよう行きません。これは、戦中派人間のせいでしょうか？。

これから、増々地域格差の大きくなる中で、お年寄りの仲間入りをしていく私が、いかに上手に在宅で暮らせるかが課題だと思います。

楽しいサロンに、また寄せてもらいたいと思います。ありがとうございました。

有難うございました

今西　美奈子

急に寒くなりました。

前から一度寄せていただきたいと思いながら、なかなかチャンスをつかめないでいた〃出会い〃に、それも丁度みんなの関心も高まっている「地域福祉を創る」というテーマの講演を拝聴できるとあって、京都から喜びいさんで参加させていただいた三人（三婆々というなかれ、本人たちはスリービューティーズと名乗っておるのです）ですが、一人は嵐山の近くに住み、二人は枚方市に隣接する京都府の南端八幡市に住んでいて、朝九時に八幡を車で出発して、丁度二時間半かかって、育徳コミュニティーセンターに着きました。

期待した通りの良い講演を聴かせていただき、得るところも多く、満足して帰途に着いた次第です。

シッチャカメッチャッカ闘っているぞというのではなく、スマートにしかし着実に運動を続けておられる＜サロン・あべの＞に魅力を感じ敬服しておりますが、今回その一端に直接触れさせていただいて嬉しく存じております。

今後共、どうぞ宜しくお願い致します。皆様のご健勝をお祈り致します。

時間を忘れて

竹村定子

何ヶ月か前に「今度、上野谷先生がサロンの会で地域福祉の話をして下さる」と冨田さんから聴き、ぜひ参加をと手帳に○印をして楽しみにしておりました。

当日別口の用事もあって、初めは早い目に失礼してと思っていたのですが、私にもよく解る話についつい引き込まれて、時間の経つのも忘れてしまいました。

今、地域福祉（阿倍野区内で）は、高齢者ネットワーク作りを始めていますが、組織化から実践する迄、まだなかなかだと思います。お聴きした話を忘れない為にも、又時々お顔を見せに来ていただいて、お話を聴かせていただけたらと思っています。

追、先生が間違えられたのか？南平さんと言われました。私は南光さんと言うよりずっと親しみやすく、身近かに思えたのですが…、ご本人は如何でしたでしょうか？

ファンになって・・・

前田裕子

すっかり、秋めいてきました。

朝夕冷え込むようになりましたが、お元気でお過ごしでございますか。

九月の「サロン・あべの」の講演のテーマが、地域福祉ということで、ぜひ参加させていただきたく、華頂短大の福祉科一回生の長女と一緒に、しっかり聞かせていただきました。

上野谷先生のファンになってしまいました。地域福祉のこと、私もいろいろ勉強したいと思っています。

ありがとうございました。

■ 編集より

今月の出会いでは参加してくださった方々とあまりお話しする時間がとれませんでしたので、サロン紙でお話ししたいとお願いしましたところ、たくさんのご意見をいただきました。地域福祉は私たちの大きなテーマです。みなさんにとっての「地域福祉を創る」について、さらにご意見をお聞かせ下さい。

おしらせ

十一月の出会い

日時　十一月二一日（土）午後一～四時

内容　「私の健康法」

場所　育徳コミュニティーセンター二階
［大阪市阿倍野区阪南町五－十五－二八：スロープ有り］

会費　なし

問合わせ先　TEL・06-691-1028（冨田慶子）

＃感謝します＃

カンパ・冊子・お菓子等ありがとうございました。お礼を申し上げます。

九月のカンパ　金二六、六八二円

上野谷加代子、崎本ヒサエ、灯、豊島知子、まごころの集い社編集部、松田峰子、松本孝、南光龍平、八木千代子、山本鈴子、山本敏子、匿名三名。

（敬称略）

追悼

大島　功さんを偲んで

ＪＲ病院で一年余の入院生活をしておられた大島功氏が、九月十三日に亡くなられました。享年六三才というまだ残り多い人生で逝かれました。

大島氏は、月刊誌「わがまち」を主宰されながら、＜サロン・あべの＞の発足準備期より参加され、サロン運営委員としてサロン活動に色々とご協力いただきました。

サロンのクリスマスでは、サンタさんになって盲導犬ケリア号と一緒に皆さんを楽しませてくれました。今は先に逝ったケリア号と懐かしい出会いをしていることでしょう。

今日までの＜サロン・あべの＞へのご協力を感謝すると共に、ご冥福をお祈り申し上げます。

サロン・あべの運営委員会

小川　哲

私と大島氏の出会いは、十五年前氏が主宰されていたグループ「ブルーカナリア」の場でした。以後、音楽会、中之島祭り、月刊「わがまち」誌発行等で、長くお付き合いをさせていただきました。

出会う都度、そのバイタリティーには敬服させられました。目のハンディーを持ちながら勇気を持ってそれに立ち向い、盲人の世界に新しい風を吹き込まれました。

病に倒れられてからも、盲導犬普及の為の出版に情熱を燃やされていました。

又、私には、父親代わりとなってプライベートな色々な相談にも快く乗っていただきました。

多くの人達が温かいお人柄を慕い、集って来ていました。

サロンのクリスマスでのサンタクロース姿が、はまり役でした。

その大島氏は、もういません。

本当に残念に思います。

ここに謹んで、ご冥福をお祈り申し上げます。

井上憲一

大島様、ご逝去の報に接し、ただただ驚き入るばかりでございます。

ご家族の方の胸中察するに余りあるところ有り、何とお慰めして良いか言葉もございません。あまりにも急な訃報に心からお悼み申し上げます。どうぞ、くれぐれもご自愛のほどご祈念致します。

大島様は、日頃から健康に注意をされていただけについお見舞いも致しませんで、面目次第もございません。この上は、大島様のご冥福をお祈りすると共に、ご家族の皆様にはご健康にくれぐれもご注意下さいますようお願い申し上げます。

取りあえず書中謹んでお悔やみ申し上げます。

敬具

あっちゃんのシングルライフ

6

山本篤江

一人で暮らしていたのは、たったの半年だったけれど、この半年が病気に負けなかった立役者でした。

今までだったら、ショッピングカタログをめくっていても、アクセサリーのページしか気にも留めなかったものが、家具の欄とかカーテンとか、目に付くものは、急にオバサン？

それに、電気屋さんに頼むものは、洗濯機、冷蔵庫、電子レンジｅｔｃ・・・

お風呂場とお手洗いの手直し、そして車椅子で移動するので、それに耐えられる床の張り替え、なんやかんやで入居するのに一ヶ月あまりもかかってしまい、費用の方もかなりのものでした。

一般の住宅はやっぱり私達には、住みにくゝお金もかかるんだなと、身にしみました。父を説得し、家族にも協力をしてもらっての引越しは、小雨降る日だったと思います。引越しと言えるかどうか分からないほど、慌ただしいというか、あっけなく終りました。

では、ジカイ。

失敗談、お楽しみ下さい！

ふれ愛

空の旅 ③

上平幸雄

ぼく自身、四月に胆石のために生まれて初めての入院生活を経験しました。それまでにも度々腹痛に悩まされていたのですが、「まさか」という感じの本当に急な入院でした。

食後にみぞおちから右の脇腹にかけて急に激しい痛みが走って、それが三十分ほどでケロリと、まるで嘘のように消えてしまうのです。そんなことが何度もありました。その日も急に痛みだしたので、すぐ横になって治まるのを待っていたのですが、一時間、二時間と待っても治まりません。結局一晩中痛みが続き、翌日になってようやく近くの病院で診察を受けました。ところが、これはただの腹痛ではないということで、別のもっと大きな病院に回されたのです。そこでやっと痛みの原因が胆石だと分かったのですが、そのまま即入院ということになりました。痛みそのものは次の日には治まっていましたが、手術のための検査や食事療法などで、結局二十日ほど入院しました。

大阪鉄道病院の内科に入院していたのですが、その同じ病棟に偶然にも、先日お亡くなりになりました大島さんが入院されていたのです。時々病室を訪ねては、調子の良い阪神タイガースのことや、サロン・あべのの将来についてなど、色々なお話を伺うことができました。世界一周がしたいとおっしゃっていました大島さん。心よりご冥福をお祈りいたします。

その後一時的に退院はしたものの、六月に入ってから胆のうの摘出手術のために再入院をしました。幸いにも手術の結果、経過共に良好で、それまでの腹痛がまるで嘘のように体調も良くなり、体力的にも回復

したところで、今回のこの旅行が当たったのです。タイミング的に、腹痛を抱えた状態や退院直後なら、この旅行には参加できなかったかもしれません。こういうところも、本当にラッキーだったとしか言いようがありません。

さて、いよいよアメリカへ向けて出発です。八月二十五日（火）、大阪国際空港からノースウェスト航空で、ロサンゼルスへ。大阪を午後二時三十五分に飛び立って、約十時間で、ロサンゼルスです。しかし、時差との関係で現地に到着するのは、その日の朝になります。つまり、この日は一日が四十時間もあるような感じになるのです。ですから機内ではなるべく寝ていようと思ったのですが、次から次に食事や飲み物が運ばれてくる上に、色々な案内や、映画などのサービスがあって、結局はずっと起きたままでした。

美智子のこんな話

岸田　美智子

ホテル介助について・・・

毎月行っている外出日に、同じ施設の障害者のカップルがおられます。彼女の方は車いす使用で、日常生活のほとんどの場面で介助が必要です。彼氏の方はほとんど介助が必要ではなく彼女の介助をしたりすることができるカップルです。この施設では他の施設と同じように男女交際が禁止されています。それで普段の生活の中で二人きりになれる場所が全くないので、外出サービスの外出日を利用してラブホテルに行かれることが多いのです。

このホテル介助の件では毎月色々話題やハプニングが多いようです。

例えば、先月彼女の介助で二十才ぐらいの若い女性介助者の方にお願いしたのですが、この女性介助者の方のお父さんがこのことをお知りになり「若い娘をどこへ連れて行くんだ」と言って、一方的に事務局にお叱りの電話があり、この女性介助者の方は、この活動を止めてしまわれました。

ラブホテルという介助はまだまだ少ないのですが、このような介助はいまだに理解され難いのだと、改めて考えさせられました。もちろん、このお父さんとも話合うために事務局の方から自宅をお訪ねしたりしたのですが、このお父さんは、「障害者には、このようなラブホテルを使ったり、セックスをしたりということは必要ない。」とはっきり言われて、こちらの施設の障害者の状況や問題などを全く受け付けられないのでした。この女性介助者の方はまだ介助が二～三回目の新しい方であり、この外出サービスの活動を十分伝えきれていなかったというこちら側の問題があります。

でも、今月も外出日を利用してやはりラブホテルに行かれたりしたのですが、ホテル側の従業員から介助者と一緒なので誤解

ひろがれサロンの輪

福祉クロスオーバー
-ボランティア活動編-

サロン・あべの
冨田慶子

障害者と健常者の出会いを求めて

私は、一種一級の身障手帳を持つ肢体障害者です。小学一年の秋にリュウマチが発病して、坂道を転がる様に重度障害になってしまいました。この間、多くの人達に世話を受けましたが、一般的に言われるいじめ等の辛い体験をした事がありませんでした。

何故かと考えた時、生まれた土地で成人し、今日迄の私を見守り励まし続けてくださった人達が居たからではないかと思うのです。

また、近年の体験として市立婦人会館で講座を受けた時「障害者の人にどんなお手伝いをすればいいの…」と問いかけられつつ、グループの一人として活動出来る状況を作って戴き、共に学ぶ楽しさを知ったのでした。これらの体験があって、あべのボランティア・ビューローに参加して、〈サロン・あべの〉への想いとなっていきました。

〈サロン・あべの〉は、あべのボランティア・ビューローに関係した障害者とボランティアが設立と運営に関わり、昭和六十一年春に発足しました。障害者の地域参加を目標にして、障害者と健常者の出会いの場を作り、そこから障害者への理解を得たいと毎月の例会を持ちました。障害者が地域参加する事は、地域で存在感を持つ事ではないかと考えました。

障害者が日常生活をしていく中で、隣近所の人達と「こんにちわ」と声掛けをし、立ち話の一つも出来る様になれば、障害者への理解も深まっていくのではないかと思うのです。そして、障害者の素顔をサロンで知ってもらい、障害の何が不自由で何が不便か。また、健常者には、障害者に接する時のとまどいと遠慮等を聴かせてもらったりして、お互いが持っている「こだわり」を少しずつ取り除いていけたらと思うのです。

サロンでは、老若男女の別も、障害者、健常者の枠も無く、毎月の出会いのテーマに関心を持った方に参加していただき、そこでお互いの考えを自由に話し合い、その中から縦関係になりやすい障害者と健常者の間柄を横関係に結びあえる機会としたいのです。

いわゆる「サロン」の言葉通りの機能を持った「場」作りをしたいと願いつつ七年目を迎えました。この間、サロンの輪も広がりました。新旧の出会いが交差して新しい出会いも生れています。「出会い」こそ理解の始まりと信じて、これからも新鮮で心豊かな出会いの場を設けて、充実したサロン活動を目ざしたいものです。また、サロンの夢としましては、情報の交換等も出来、誰もが憩える常設のサロン作りです。この夢を大切に育んでいきたいものです。

『大阪の社会福祉』九月号に掲載されました

されて、「四人で使うな。」とか「男同志、女同志で使うな。」とかなどと言われながらもうまくいけたようです。

大切な介助者を一人失ってしまいました が、今後も私達の活動でこのカップルを応援していきたいと思っています。

選んだ責めを負う

四年前、はじめてヨーロッパに行ったとき、いちばん弱ったのは、なにもかもいちいち選ばなければならなかったことである。

福祉施設を訪問して、いろいろ話をしたあと、ひと段落つくと、きまって聞かれるのだ、「さて、ここでこの続きを議論しますか、それともホテルに帰って休みますか、それとも私たちといっしょに食事をしますか」。

日本だとどうだろう、客がわざわざ外国から来たのだ、自分に時間があれば食事に誘うだろうし、そうでなければ理由を言って謝るようにしてホテルに帰ってもらうだろう。なによりも、そういう選択をさせるということは客に失礼だという感覚がある。だいたい客が断っても、無理やりに食わせたり飲ませたりするのが、日本の流儀だろう。

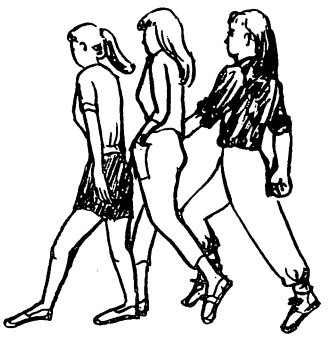
なんと返答したらいいのか迷うばかりだったが、あまりにそういうことが続くので、あるときはっきり言ってみた。「日本では客は何も考えないでいい。なにもかも迎える人が選んでくれる。そういう習慣にあるものだから、いちいち選択を迫られると疲れてしかたがない。そちらに時間的余裕があれば、いっしょに食事をしてもらいたいし、そうでなければ私は帰ります」。

すると、ドイツ人の彼は答えた。「客に選んでもらうのが、ヨーロッパの礼儀です」。

レストランにはいれば、またそこで肉の焼きかげんはどうしますかなどと細かいことを聞いてくる。日本のレストランでも高級なところは同じように聞くらしいが、日本料理の店で天ぷらの揚げかげんを聞いてくるだろうか。選ばせないというのが、日本的な配慮である。

コーヒーの味のようなわずかなことでも、砂糖をどうするかミルクはどうかなどと聞いてくるが、同じようなことを聞く日本人もふえた。しかし、番茶の濃いめがいいか薄めがいいかなどと、昔の日本人は聞かなかったものである。

コーヒーといえば、自動販売機も最近はあまりにいろいろな種類の缶コーヒーを出しているので、迷わせてはいけないという配慮なのか、「今月のおすすめ」などと特定の銘柄を推薦しているときがある。「今月」もなにも魚や野菜ではあるまいし、季節によって缶コーヒーの味が違うわけでもなかろうと思うのだが、これも客に選ばせな



いようにする気づかいなのだろう。

先日テレビで、アメリカの小学校の給食の風景が映されていたが、驚いたことに、子どもがいちいちパンや肉やデザートを自由に選んでいる。その一方で、子どもたちに何が身体にいいのかを教えなければならないのですと教師が言っている。それならば初めから日本の給食のようにセットにして与えてしまえばいいと思うのだが、それをしないのは選択の自由を尊重する文化があるのだろう。

選択の自由が辛いのは、その結果に責任をもたなければならないからだ。家に泊めてあげると言ってくれたイギリスのソーシャルワーカーの家にはいると、すぐに「あなたはシャワーをあびてすぐに寝ますか、それとも軽く食事をしますか、それとも議論をしますか」と、たて続けに聞いてくる。イギリス人は一般にあまり感情を顔に出さないから、まるで叱られているような感じだ。

議論をすると言うと、そのための専門的な話題を自分から出さなければならない。軽く食べるというと、それに応じた軽い話題を提供しなければならない。苦手な英会話にすっかり疲れていた私は「寝ます」と答えた。つまらない選択だったが、選んだのは私の責任なのである。

欧米人の生き方をみていると、一般的にいって、日本人よりも自由に生き方を選んでいるという印象をうける。「世間なみ」などという外の基準はない。自分で自分の生き方を選び、その責任もまた自分がとるという倫理感覚である。

定職につき結婚もして、三十代半ばになり、まあこれからは「世間なみ」に朝がきて夜をまつような生活をしていればいいと思っていた私だが、どうやらそうでもないようだと気づきはじめた。いまは過去に行なった選びの責めを負わなければいけないし、これからも、責めを覚えながら新しく道を選んでいかなければならない。

だれの責めでもない、自分の選んだ責めなのだという感覚を、生きる日々に新たにしたいものだ。

※投稿直前に大島功氏が亡くなったことを知った。ご冥福を祈りたい。

（知）

「おもろい　姉ちゃん」

田淵　美登利

「ＮＯ」と言える指導

勤務時間も終り、事務室に職員も少なくなったある日の夕方のことです。

ある職員が私の目の前に座っていた男子寮生に「悪いけど、ちょっと手伝ってほしいのだけど」と声をかけました。

ところが、彼は照れ屋さんで、うつむいて恥ずかしそうにするばかりです。

思わず私の口から出た言葉は「イヤならイヤって言いや。」でした。

その言葉に、私は自分で驚きました。

なぜなら、普段自分の作業科の寮生には、「ＹＥＳ」と言うことばかり指導していることに気付いたのです。

「ＮＯ」を言える指導こそ、彼らの権利を守っていくのに大切だと、気付いた出来事でした。

ナンペイの ひとこと＆ふたこと ㉕

＊筆不精の虫＊

この「ナンペイのひとこと&ふたこと」欄を、先月は休ませて頂いた。

原因は、すべて私に永い間巣づくっている「筆不精の虫」にある。

「ハワイ珍道中」を含めると、三年近くも「サロン誌」に拙文を書かせて頂いておきながら、「今さら筆不精の虫とは何を言うのか」とお叱りを受けそうにも思うが、もともとの私の中には文章を書くことなど苦手な「筆不精の虫」が住みついているのだと思っている。

現実に、この「虫」のおかげで学校時代などは「作文」の成績は決して褒められたものではなかったし、特に宿題に「読書感想文」が出されたときなどはまさに七転八倒の苦しみを味わいながらとにかく原稿用紙一枚程度には文字を埋めるのだが、読み返してみると「感想文です」と言うには程遠く元々の文章の「要約」にすぎない文章を書いていたことも度々だった。

その後は、言語障害というハンディを多少なりとも軽くするために「コミュニケーション」の手段として、出来るかぎり分かりやすい文章を書くように心掛けてはいる。

それでも、やはりもとから巣づくっている「筆不精の虫」はなかなか退治することが出来ないでいて、時々暴れ出す。この悪しき「虫」の為に「サロン誌」の編集子には毎度毎度ご迷惑を掛けて、ついに先月は連載を休むことになってしまった。

しつこい、「筆不精の虫」を退治する方法を御存知の方がおられたならぜひともお教え願いたい。そうすれば、いつ届くか分からない私の原稿を待っておられる編集子の胃も痛まずに済むのだが・・・。

南光龍平

編集後記

先月、編集の都合で〆切を早くしたため南光さんと山本さんの連載をお休みしたら、「からだの具合でも悪いの」と心配された方がおられたそうです。サロン紙のすごさを感じるとともに、いつも「連載は休んだらアカン」と言われていた鬼編集長（石）さんのことばをあらためてかみしめました。来月から、あのあたたかい紙面が復活です。

（は）

編集人；サロン・あべの運営委員会・＜サロン・あべの＞NO.76[`92.10.17 発行] 定価￥１００．
代　表；上平幸雄〒545 大阪市阿倍野区阪南町２－２０－１９－２０３　電話06-621-4365
連絡先；冨田慶子〒545 大阪市阿倍野区阪南町６－３－２６．電話０６－６９１－１０２８
表　題；斉藤孝文・筆
印　刷；セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町２－２－１０－１０１．TEL.06-691-2365.

発行人；関西障害者定期刊行物協会［大阪市城東区東中浜２－１０－１３緑橋グリーンハイツ１Ｆ］

毎月十二回（二・四・六・八の日）発行　一九九一年九月三日第三種郵便物認可